# 足立芳宏著『近代ドイツの農村社会と農業労働者——〈土着〉と〈他所者〉のあいだ——』

加藤房雄

「土着と他所者のあいだ」という副題を持つ足立芳宏氏の近著『近代ドイツの農村社会と農業労働者』は、序章と終章を周到に配しつつ、その本論は、全五章から成る二部構成の大著である。まず、本書の章立てを示しておこう。

序章　課題と視角

第Ⅰ部　第二帝政期における農村社会と農業労働者

第一章　北西ドイツにおける大農—農業奉公人

第二章　北西ドイツ農村における「土着」と「他所者」

第三章　近代ドイツ農村と外国人季節労働者

第Ⅱ部　ワイマール・ドイツにおける農村社会と農業労働者

第四章　北西ドイツの農業労働者と農村ナチズム形成

第五章　後期ワイマール時代のグーツの世界

終章

書評としては、すでに、古内博行・柴田英樹両氏によるものが、『土地制度史学』第一六四号と『社会経済史学』第六五巻第一号に掲載されており、そこでは、両者両様の簡潔な内容紹介も行われている。そこで、本稿においては、紙数の制約もあり、梗概の解説については上記の二書評にこれを委ね、また、先の評者が示す問題点との重複を避けながら、評者自身の観点からする評価と批判の両論点を、できるだけ率直に書き記すことにより、責めをふさぐ

こととしたい。

## I　評　価

本書は、一口で言うと、片やでのドイツ農村社会史、そして、他方におけるドイツ・ナチズム論の双方に関する斬新な力編である。いま、八〇年代後半から九〇年代に絞って、日本での研究史を概観すると、およそ次のようになろうか。さて、第一のドイツ農業史について、評者はかつて、以下の問題提起を行ったことがある。すなわち、なお記憶に新しいあの歴史的なドイツ再統一と時あたかも相前後して上梓された一九九〇年刊の二著、――拙著の引き合いはいささかおこがましくはあるが――、加藤房雄の『ドイツ世襲財産と帝国主義』そして松尾展成氏による『ザクセン農民解放史研究序論』さらに、これに加えて、佐藤勝則氏の『オーストリア農民解放史研究』（一九九二年刊）の三著をもって、「創造の新局面」とも呼べる、ドイツ語圏・アグラールゲシヒテ（Agrargeschichte）研究の新たな隆盛の時期を迎えたと言えるのではあるまいか、と。[1] 大方のご判断に委ねるほかないこの点の当否については、ひとまず措くとして、その時以降、ドイツ農業史・農村社会史になんらかの形で密接に関わる諸研究が、順不同で列挙すると、飯田収治・金子邦子・田中優・山﨑彰・飯田恭・平井進氏らによって次々と進められ、先の隆盛に力強く続いているとは言うものの、それらは、今日のところまだ、まとめられた一書の体裁を成す学界の共有財産となるまでには至っていない。この点で、足立氏の近著は、久久の快挙と言ってよい。ベルリン工科大学のH・ライフ（Heinz Reif）教授が憂慮してやまぬ、ほかならぬドイツの現場での農村社会史研究「弱体化」[2]の近況を知るにつけ、一人のコレーゲとして、わたくしは、日本語でのこの好書の出版を見、同慶の念にたえない。

次に、ドイツ近代史の研究にとって「基軸的」（足立著、四ページ。以下、引用はページ数のみを記す）な意義を持つ、その「中心軸」（二一五ページ）たるナチズム論の動向に視点を移すと、その主要な著作を示すだけでも、原田溥・野田宣雄・中村幹雄・宮田光雄・豊永泰子の諸氏、さらには、栗原優・永岑三千輝・田村栄子・小野清美・西牟田祐二氏らの近作がそろい、文字どおり枚挙にいとまがない。評者には、「ナチ化に関する十分に納得できる解釈はなお得られていない」[3]と断じた豊永泰子氏のかつての評言が、

いまなお、強く胸に迫ると感じられてならないのであるが、ともあれ、足立氏の書物は、こうした言わば百家争鳴の研究状況に、新たな一石を投じたものと言えるだろう。「農業労働者の社会史の深み」（二二ページ）からの該問題への接近を試みた本書によって、ナチズム論には、有力な最新成果の一つが付け加えられることとなった。

では、学界に投じられたこの一石の斬新なところは、いったいどこに求められるのであろうか。わたくしは、さしあたり以下の三点に、それを見て取りたい。第一は、着眼点である。「社会史的な問題意識」（三ページ）に立つ本書は、「従来の農民層の経済的・政治的行動のみに焦点を合わせるアプローチ」（二四八ページ）とは厳密に一線を画した「農業労働者の社会史」である。それゆえ、主要な問題関心は、一つには、「近代市民社会への不適合を通じてそこから疎外された、単独で放浪する農業移動労働者としてのモナーヘン」（一〇一ページ）へ向けられることになる。「『路上の君主たち』を自称する放浪者的な労働者たち」（四七ページ）であったかれらは、「農村のルンプロ的労働者」（二三二ページ）にほかならない。さらに、「『外国人労働者』という新しい労働力カテゴリー」（一三八ページ）に、二つ目の力点が置かれる。それは、「『家父長制の空白に埋め込まれたスウェーデン人奉公人』としてではなく『季節労働者集団としてのポーランド人』としてはじめて安定的に成立した」（一四六ページ）。ここでは、農民層の「『分解論』的視座」（四ページ）が斥けられるとともに、「（広義の）エスニシティ」（同）問題への目配りを利かせた上で、若尾祐司・肥前栄一氏らによる農村下層民研究との接続が図られるのである。

第二に、意欲的な問題意識の斬新さが挙げられなければならない。この点で、本著は、素朴実証主義的な単なる事実集積の著作ではいささかもなく、「ドイツ農業論の戦後歴史学的理解」（二五ページ）への批判書、いや、より端的に言って、これに対する敢然たる挑戦の書である。氏は、「私がここで提起したいのは、この時期の農業労働者問題のありようを、『分解論』『三分割制論』『単一の農業労働者階級の形成』論を軸に論じるのではなく、新たにこれを農村の『広義のエスニシティ』の問題として捉え直し、その具体化をはかることである。そのことによって従来の議論に漂う停滞感を払拭し、あるいは従来の議論が陥っていた袋小路を抜け出すことができるのではないか」（一五

ページ）と言い切るのである。さらに、氏は、「本書のテーマは農業労働者であって土地所有論ではない」（三一ページ）とし、「『資本主義論』を越えて問題を『近代社会論』として論じたい」（二九ページ）と述べると同時に、こと「居つき工業化」（九四ページ）の問題に関するかぎり、これを「帝国主義の問題として扱う立場」（一一二ページ）にも立とうとする。このように、著者の意欲はまことに旺盛かつ斬新であり、そのこころざしはあくまでも高い。

第三に、特筆されてしかるべきは、やはり、実証である。その厚みを知るには、文献渉猟の跡を示す巻末の参考文献を一瞥するだけで、こと足りよう。ここでは、評者の印象にとりわけ強く残った三つの重要史料に基づく分析を紹介するにとどめておきたい。さて、三史料とは、第一に、農業労働者F. Rehbein（一八六七―一九〇九年）の自叙伝、第二に、P. Gutknechtの研究書（一九〇七年刊）、そして第三に、Thomsen家所有の賃金帳と家計簿のことなのであるが、さしあたり、読者は試みに、五四―五五ページを見られたい。そこで氏は、あの自叙伝の精読を踏まえつつ、ホルシュタイン地方に存した、とある大農家族の一九〇〇年頃のスナップをかかげて、「奉公人と農民家族の社会的距離感が、この写真には彼らの空間的距離間として見事に可視化されている」と述べている。説得的な叙述である。さらに、グートクネヒトの基礎資料を検討した詳細な表（一五三―一五六ページ）は、二〇世紀初頭期におけるザクセン・マクデブルク地方の労働力構成の実態を伝えてあまりあり、また、一九二八―三二・三八年間のトムゼン家に関する原史料の分析（二一九―二二一ページと二二九ページ）も、実に丹念である。こうした厳密な基礎作業が、本書の堅実な実証成果を支えている。わたくしにとっては、この高い実証水準が、最も感銘深いものであった。本著最大の長所として特筆しておきたい。

## II　批　判

このように、本書は、着眼点も問題意識も、そして実証の面においてまで、斬新なところが三拍子そろった立派な作品である。わたくしは、足立氏のこのたびの快挙に対して、心からの讃辞を惜しまぬものである。しかし、それにもかかわらず、いや、むしろそうであればこそ、同時に他方において、いささか手厳しくもあろう批判的言説を開陳することもまた、評者に課された避けて通れぬ責務の一つ

であろう。わたくしは、ここであらかじめ、著者と読者に、評者の単刀直入な物言いへのご寛恕をお願いしておきたい。

さて、端的に言って、課題の大きさと得られた結論のある種のあやふやさとの乖離が、気になる一点である。一般論にすぎぬとは言え、こころざしの高さは、たとえそれがどのように高くとも、それだけでただちに、成果の豊かさを保証するものでは必ずしもない、という巷間往往にして見受けられる世の習いは、この意気軒高の作者にとっても、決して例外ではありえなかったのであろうか。本書の一大テーマたる「農村のナチ化」について、「その論理を浮かび上がらせること」（二三ページ）は、著者自身が序章で設定した固有の課題の一つである。しかし、第II部第五章の「おわりに」において、著者は、「グーツ地域のナチ化の直接の過程についての分析を行ったものではない」（二九五ページ）と述べざるをえなかった。あえて言うなら、ここでの結論は、著者自ら認める「文脈の存在の予感」（三〇五ページ）になおとどまったままなのではあるまいか。自身で設定した課題の大きさに比し、得られた結論に、少しく抽象的であやふやなところが残ると言っては、はたして不当かつ言いすぎであろうか。

この点と関わって、ここでは、さしあたり、以下の三つほどの問題性を指摘しておこう。第一は、一九二九年三月に起きた、共産党グループとナチ党員との衝突事件に関する分析中に、次の記述が見られる点である。すなわち、「根拠が薄弱であるが、先に述べた奉公人の二類型にこれを仮説的に対応させておきたい。つまり、土着の生家との絆のなかにある奉公人層たち（少数を）ナチスの側に、単独者で流動性の高い奉公人層（多数）はむしろモナーヘンや共産党側に、というようにである」（二四七ページ、傍点評者）、と。仮説的とする断りはあるものの、これでは、実証的根拠のない単なる推量の域を出るものではないとのそしりを免れえぬのではないだろうか。

第二に、二〇世紀初頭期のザクセンにおける労働力構成を分析した記述にも、にわかに首肯しがたい箇所が散見される。一六二―一六三ページを見られたい。著者は、「『脱穀歩合制』の解体は、……村落定住労働者の脱農業雇用化＝長期的には存村農外労働者化（通勤労働者化）に帰結していく」、また「グーツの農業雇用から分離した村落定住の男たちは、ザクセン地域では在地のままでの通勤

労働者化、いわゆるペンドラー化に帰結していく」（傍点評者）と述べるのであるが、この重要な結論を論証する、いや、論証とはいかないまでも、少なくともそれを類推させるに足る客観的な根拠は、なに一つ示されていない。つまり、それ自体すぐれて興味深いペンドラー化について、その帰結は論断されても、その論証はない、と言うほかないのである。このように、本書の実証には、ところどころに、言わば粗密のアンバランスが見受けられ、わたくしが先に指摘した香り高い実証性が、全編を貫くものとは必ずしもなりえていない点が、強く惜しまれてならないのである。

総じて、著者は「本書の核」（三四二ページ）を後編第四章に置くのであるが、約一八〇ページの厚みを持つ前半部分に比べた、第II部約一〇〇ページの軽さも気になるところではある。むしろ、第二帝政期を論じた第I部こそが、「本書の核」ないしは白眉を成すとの思いを禁じえなかったのは、はたして評者一人だけであろうか。

第三に、足立氏は、旧東独時代からの代表的農業史家の一人であるH.-H.ミュラーの季節労働者に関する一九九一年の一論に触れ、それは、「〈農業集約化・資本主義化＝プロレタリア化＝搾取される低賃金労働力＝『外国人奴隷制』〉という定式で示されるような『資本主義』告発型の枠組み」にほかならず、そうした「接近の仕方においては、外国人農業労働者は近代農村社会史の問題としてどう論じられるべきかという問題意識があまりに希薄である」（一四六ページ）と厳しく論難する。だが、いやしくも先行研究に「方法的反省」（二〇二ページ）を求める高い立場に自ら進んで立とうとする以上、論考一本のみの検討で、先行者の研究を総括してはならず、できうるかぎりその総体に迫る努力が惜しまれるべきではない。そもそも、H.-H.ミュラーの研究史上の意義にしてからが、それには、季節労働者問題に関するここでの足立説とは違う、全く別の高い評価もありうるのであって、その点は、つとに、わたくしのかつての小論が示したとおりと思われる。[4] それゆえ、一四六ページと二〇二ページで展開された農業季節労働者の問題に即するかぎり、著者の研究史整理の仕方は、必ずしも緻密なものではなく、「方法的反省がなお不十分である」とする批判的言辞も、研究史に対するなにかしら高圧的あるいは高踏的なにおいが漂う感をいなめないのである。

さらに、氏は、ここで、「本章の主要な課題は、国家の外国人政策史や告発すべき資本主義の歴史ではなく、この新しいカテゴリーとしての『外国人農業労働者』の社会的形成の過程それ自体を明らかにすることである」（傍点評者）とまで言う。しかし、わたくしは、いや、そうではない、とあえて異を唱える蛮勇を自らに課そう。すなわち、「『外国人農業労働者』の社会的形成の過程それ自体を明らかにすること」そのものが、告発すべきか否かの「主観主義的行為」[5]（J・コッカ）は論外として、ドイツ「資本主義の歴史」叙述とドイツ経済史研究それ自体のいっそうの豊富化と精緻化に貢献するのであり、したがって、ここでの氏の議論の前半と後半とは、なんら背馳するものではありえない、と思われてならぬのであるが、いかがであろうか。

ともあれ、J・コッカが力説したとおり、あの「日常史」が、「過去を、圧倒的な経済的強制の作用や、かの名高い客観的諸条件からのみ説明しようとする、矮小化されたマルクス主義理解に対する拒絶」[6]をも含んでいたことは事実であり、この点で、足立氏の方法的立場と「日常史」のそれとが、ある種の親近性で結ばれることもよく理解できる。だが、わたくしには、それでは、なぜ「資本主義の歴史」だといけないのか、また、「資本主義論」を越えた「近代社会論」の構築と氏は説くのだが、では、資本主義論のない近代社会論とはいったいなにか、理解に苦しむと言う以外にないのである。

最後に、この三つ目の論点とも関わって、本書を読み進むにつれて沈思黙考を促されざるをえなかった以下の事柄に関する感想をしたためることによって、拙評の結びにかえたい。それは、一言にして、「社会史」とはいったいなにかという素朴な疑問である。まず、足立氏の言うところを聞こう。二二―二三ページを見られたい。「民衆文化論」を目指す「社会史」研究のとるべき態度は、「農業労働者の社会史」の場合、「なによりも農業労働者の日常的な生活世界のありようとその変容をこそ問題にする視角」を持たなければならず、「理念」ないし「『イデオロギー』の扱い」についても、それを「日常史的な文脈でいかに理解するか」が、常に意識されなければならない、と（傍点評者）。したがって、単純化の嫌いを意に介さず、有り体に言うと、足立氏の場合、「社会史」とは「日常史」にほかならぬと言えよう。「農村の日常空間」（二一五ページ）を

重視するこうした「日常史」的視角は、それ自体として興味深く、事実、F・レーバインの自叙伝分析が如実に示したとおり、歴史研究にとって裨益するところもさだめし大なのであろう。

しかしながら、ここでただちに想起される別の事柄は、「日常史」からの挑戦を真摯に受け止めた「構造史家」・「社会史家」J・コッカの誠実な思索である。コッカは言う。「一方における構造と過程、他方における行為と経験——この両者の連関を、屈折と不一致との歴史的に変化しうる関係として把握することが重要なので、こうした連関を否定したり無視したりすることが重要なのではない。そして、「経験と構造との結合は、構造—過程史の方からむしろ行うべきであろう」、と。[7] したがって、一方の論者が、「社会史」を基本的に「日常史」に還元する態度を示すのに対して、もう片方のコッカの場合、「日常史」の挑戦を正面から受け止めた上で、この「日常史」と「構造史」との結合を、むしろ「構造史」の側から積極的に押し進める一筋の道に、「社会史」研究の活路を見いだそうとする姿勢が際立つと見てよいであろう。研究の方法論問題に直結する両者いずれの立場ないしは「方法的反省」が、より稔り豊かなのか。難しい問題であり、評者には、にわかに即断できない。わたくしは、ここでは、ただ、足立氏が研究史に厳しく突き付けた「方法的反省」は、まさに、評者自身にとっても謙虚に受け止めなければならぬ重い課題の一つにほかならない事実を認め、この重大な問題の提起を受けたことに感謝しつつ、著者との対話が、今後よりいっそう深められ、拡げられるよう願って、筆を擱くことにしたい。

(1) 佐藤勝則『オーストリア農民解放史研究——東中欧地域社会史研究序説——』(多賀出版、一九九二年)に対する拙評(『歴史』第八〇輯所載、一九九三年)参照。
(2) ハインツ・ライフ著、拙訳「東エルベ農村社会史論」の訳者あとがき、『広島大学経済論叢』第二一巻第三号、一九九八年、七六ページ。
(3) 『社会経済史学』第五四巻第四号、一九八八年、一三四ページ。
(4) 拙稿「旧東独における農業史研究の最新成果とその意義——批判的継承のために——」(『土地制度史学』第一三八号所収、一九九三年)参照。
(5) ユルゲン・コッカ著、肥前栄一・杉原達訳『歴史と啓蒙』(未来社、一九九四年)五九ページ参照。
(6) 同上、五〇ページ。

（7）同上、五九、六二ページ。

足立芳宏著『近代ドイツの農村社会と農業労働者――〈土着〉と〈他所者〉のあいだ――』、京都大学学術出版会、一九九七年刊、A5判、Ⅷ＋三五〇頁、本体六二一四円

（かとう　ふさお・広島大学経済学部教授）